日本語學硏究　第12輯(2005. 3. 20. pp.131～142)

味覚形容詞「甘い」「辛い」「しぶい」「苦い」「塩辛い」「酸っぱい」の基本義と別義に関する新聞および小説のコーパス出現頻度の解析

林炫情* · 玉岡賀津雄** · 宮岡弥生***

＜要 旨＞

味覚形容詞 「甘い」「辛い」「しぶい」「苦い」「塩辛い」「酸っぱい」의 基本義와 別義에 관한 신문 및 소설 말뭉치 出現頻度 解析

본고에서는, 신문과 소설 속에 나타나는 현대 일본어의 味覚形容詞「甘い」「辛い」「しぶい」「苦い」「塩辛い」「酸っぱい」의 미각에 대한 基本義와 그 전용인 別義의 出現頻度 패턴에 대하여, 계량적인 측면에서 현대 일본어의 味覚形容詞의 多義構造의 일면을 論 하였다. 基本義와 別義의 出現頻度를 전체적으로 파악하기 위해 決定木(Answer tree)을 도입해 분석한 결과,「塩辛い」「酸っぱい」는 基本義로서의 사용이 압도적이며, 別義로서의 사용은 극히 적었다. 그러나,「しぶい」,「苦い」「甘い」「辛い」는 基本義 보다도 別義로서 쓰이는 경우가 많았으며,「しぶい」와「苦い」의 경우, 소설과 신문에서의 사용 패턴에 차이가 나타나, 소설에서의 別義의 使用頻度(86.11%)도 높지만, 그 이상으로 신문에서의 別義의 使用頻度(96.90%)가 극단적으로 높았다. 또한, 別義内의 意味用法상의 延語頻度와 別個語頻度의 차이를 신문과 소설로 비교해 본 결과, 신문과 소설에서 차이가 보이는 意味用法을 밝힐 수 있었다. 예를 들면,〈うっとりと快い〉의미의「甘い」,〈不機嫌な〉의미의「苦い」는 소설,〈不十分な〉의미의「甘い」,〈つらい・苦しい〉의미의「苦い」는 신문에서 자주 쓰이는 경향을 보였다. 또,〈不機嫌な顔つき〉의「しぶい」처럼, 別個語頻度에서는 차이가 없으나, 延語頻度에서 차이가 나는 경우가 있었으며, 이것은〈しぶい顔〉나〈しぶい表情〉와 같은 표현이 신문에 자주 출현하고 있는 것에 그 원인이 있다고 해석된다. 이처럼 신문에서는 소설에 비해 味覚形容詞가 특정의 名詞와 共起하여 別義로서 빈번하게 사용되는 것을 알 수 있었다.

主題語：現代日本語の味覚形容詞、基本義、別義、コーパス、決定木(Answer tree)

1. はじめに

「甘い香り」「しぶい声」「柔らかい色」などといった五感（視覚・聴覚・臭覚・味覚・触覚）を表す形容詞の意味転用については，認知言語学の分野で，もっぱら「共感覚的比喩[1)]」用法という枠組み

*広島大学大学院国際協力研究科、客員研究員(第一著者)
**広島大学留学生センター、教授
***広島経済大学、専任講師

のなかで取り上げられてきた。しかし，それぞれの形容詞がもつ意味の個別的な側面について，大規模なコーパスを利用して出現頻度を調べたデータは提示されていない。とりわけ「甘い」や「辛い」のように味覚を表す形容詞は，「甘い香り」「しぶい声」などの共感覚的比喩表現だけではなく，「甘い規則」，「しぶい回答」といったメタファー的な意味に拡張された例も数多くみられる。そのため，日本語の味覚形容詞の特徴をより明らかにするためには，まず味覚形容詞のもつ多義性とその出現頻度のパターンを明確にしながら，共感覚的比喩用法とその他の比喩表現の在り方を総合的かつ体系的に検討する必要がある。そこで，本研究では，現代日本語の味覚形容詞の特徴をより明らかにするために，最も基本的な味覚形容詞と思われる「甘い」「辛い」「しぶい」「苦い」「塩辛い」「酸っぱい」の６種類を取りあげ，計量的な側面から味覚形容詞の多義構成を明らかにすることを目的とした。しかし，共感覚的比喩用法とそれ以外の比喩の在り方などについては紙面の都合もあり，次の機会に譲ることとし，本稿では味覚形容詞の基本義と別義の出現頻度のパターン，そして別義ごとの出現頻度のパターンについて詳細に報告することにする。なお，出現頻度を集計する際，こうした味覚形容詞の基本義と別義は，使われるテキストによっても使用頻度が異なると予想されるので，本研究では新聞と小説の２種類のコーパスを基に，重なり出現頻度（以下，重なり頻度）および延べ出現頻度（以下，延べ頻度）を算出し，意味用法のパターンの異なりを検討した。

2. 研究方法

小説と新聞のテキストはいずれも書き言葉ではあるが，小説には会話文も多く含まれており，客観的かつ論述的な文をより多く含む新聞のテキストとその性質が異なっていると考えられる。しかし，新聞には様々なジャンルの記事が含まれていることを考えると，ジャンル別の検索が最適ではある。けれども，残念ながら本研究で用いたコーパスはジャンル別に検索できるような検索システムが確立されておらず，また，ジャンル別に詳細に分類すると総語数が少なくなり，計量的な検索後に統計解析ができなくなるという問題がある。したがって，現況でのコーパスの規模および統計解析の便宜を考え，本研究では現状のコーパスで比較的語彙数の多い新聞と小説の２種類で比較することにした。新聞の数値は味覚形容詞の一般的な出現頻度指標として利用でき，また小説は，ジャンルがやや限定された例として捉えて，新聞の場合と比較することができるのではないかと思われる。具体的には，1991年度から1994年度までに印刷された毎日新聞コーパス(総語数＝88,454,573語)と，小説を集めた青空文庫コーパス(総語数＝8,370,720語)を用いた。

共起頻度の算出は，「甘い」「辛い」「しぶい」「苦い」「塩辛い」「酸っぱい」の６種類の味覚形容詞について，それらが修飾する名詞と共起して出現する文を抽出し，それぞれの重なり頻度および延べ頻度を計算する方法で行った。味覚形容詞と名詞のコロケーションの検索においては，深田淳が作成したコロケーション情報抽出システム[2)]である『茶漉』を利用した(http://prairie.lang.nagoya-u.ac.jp/

chakoshipub.html）。また，味覚形容詞の意味分類については，『大辞林』(1995)の意味分類に基づいて，味覚形容詞のもつ味覚に関する本来の意味を基本義とし，基本義から派生された意味用法を別義とした。例えば「甘い」の場合，新聞と小説で別々に「甘い」を含む全文を検索する。それから，「甘い」によって修飾される〈期待〉〈親〉〈収穫〉〈気持ち〉などの名詞ごとに重なり頻度および延べ頻度を計算した。また，「甘い」の基本義と別義に関する意味分類では，『大辞林』(1995)に記載されている「甘い」に関する味覚の本来の意味〈砂糖や蜜のような味〉に関する意味用法を基本義とした。そして，後の〈香りや雰囲気などが蜜の味を思わせる。うっとりと快い〉〈人の心を引き付けて迷わせる〉〈物事に対する態度がなまぬるい。厳しさ・正確さに欠ける〉〈満足できる状態ではない。不十分だ〉〈程度が軽い〉などの６つの意味用法を別義として分類した。なお，それぞれの例文の意味用法の分類は，抽出された文の前後の文脈を見ながら，『大辞林』(1995)で分類された意味用法のなかで，どの意味用法に入るのかを判断し分類した。他の味覚形容詞についても同様の手順で分析した。

3. 分析と考察

3.1 味覚形容詞の基本義と別義の区別

新聞および小説のコーパスでみられる６種類の味覚形容詞の基本義と別義に関する延べ頻度を分かりやすく表で示したのが表１である。分析では，味覚形容詞の共起頻度を全体的に把握するために，意味の違い(基本義と別義)を目的変数として，味覚形容詞(６種類)とコーパス２種類(小説と新聞)の２つの説明変数で区別する「決定木(Answer Tree)」[3]の統計解析を使用した。決定木の解析では，SPSS社が開発したAnswer Tree 3.0J (SPSS，2001)に準備されている解析から，CHAID (Chi-Squared Automatic Interaction Detection)を使用した。

表1　味覚形容詞の延べ出現頻度のクロス集計表

コーパス	味覚形容詞	意味				合計
		基本義		別義		
小説	甘い	28	24.3%	87	75.7%	115
	苦い	13	17.8%	60	82.2%	73
	渋い	2	5.7%	33	94.3%	35
	辛い	3	50.0%	3	50.0%	6
	酸っぱい	4	80.0%	1	20.0%	5
	塩辛い	4	100.0%	0	0.0%	4
新聞	甘い	92	18.2%	413	81.8%	505
	苦い	16	3.7%	420	96.3%	436
	渋い	2	1.4%	143	98.6%	145
	辛い	19	44.2%	24	55.8%	43
	酸っぱい	17	89.5%	2	10.5%	19
	塩辛い	12	100.0%	0	0.0%	12
合計		212	15.2%	1186	84.8%	1,398

分析の結果，図1のような決定木が描かれた。図1を概観すると，決定木は一番上の親ノード0から「甘い」，「辛い」，「しぶい・苦い」，「塩辛い・酸っぱい」からなる4つの子ノードが分岐している。この4つの子ノードが，ノード0である基本義と別義を区別する味覚形容詞のパターンである。「しぶい」と「苦い」，「塩辛い」と「酸っぱい」が同じノードになっているのは，基本義と別義の出現頻度パターンが同じであることを意味している。それぞれの用例の出現頻度を見ると(図1の割合を参照)，全体の出現頻度1,398回(100.0%)のうち，「甘い」が620回(44.35%)，「辛い」が49回(3.51%)，「しぶい・苦い」が689回(49.28%)，「塩辛い・酸っぱい」が40回(2.86%)であった。さらに，ノード3からノード5とノード6の樹木が伸びているが，これは，「しぶい」と「苦い」の，基本義と別義の使われ方が小説と新聞で異なっていることを示す。他の味覚形容詞はそれ以上樹木が伸びていないので，小説と新聞とで違いは認められなかったと解釈できる。

本研究で用いた6種類の味覚形容詞全体の，基本義と別義の出現頻度パターンの違いをみると，ノード0から分かるように，出現頻度の合計1398回のうち基本義は212回(15.16%)，別義は1,186回(84.84%)と，全体的に別義として使用される方が圧倒的に多いことが分かる。しかし，基本義と別義の出現パターンをより詳細にわけてみると，味覚形容詞ごとに少し違いがみられ，図1のノード1からノード4までの4つに分類することができる（x^2=285.74,df=3,p<.0001）。味覚形容詞のなかで最も使用頻度の高い「甘い」では，基本義が120回(19.35%)，別義が500回(80.65%)で，別義の使用が多く樹木がそれ以上伸びていないことから，新聞と小説でこの傾向に違いがないといえる。次に，ノード3は，「しぶい」と「苦い」をあわせたものであるが，別義が656回(95.21%)であるのに対して，基本義が33回(4.79%)のみで別義での使用が多かった。ただし，この両者は，新聞と小説で使われ方が異なっており（x^2=23.25,df=1,p<.0001），図1のノード5とノード6から分かるように，全体的に別義の使用が多いものの，小説と新聞とでの割合をみると，小説では基本義に使われる割合が合計108回中15回(13.89%)と，新聞の合計581回中18回(3.10%)に比べてやや多いといえる。さらに，「辛い」でも，別義が49回中27回(55.10%)で，基本義の22回(44.90%)をわずかに上回っている。しかし，「甘い」，「しぶい」，「苦い」と比べると，基本義の使用頻度は高いといえよう。一方，「塩辛い」と「酸っぱい」は，両方とも同じ傾向を示しており，基本義が40回中37回(92.50%)で，別義の3回(7.50%)に比べ基本義がはるかに多用されている。このように，基本義と別義の使い方が味覚形容詞ごとに異なっていることが分かる。

以上の決定木の分析では，「甘い」，「しぶい」，「苦い」，「辛い」は別義で使用されることが多いことが分かったが，これらの別義にはさらに多様な意味が存在する。そこで，次に各味覚形容詞について別義ごとに使用頻度を算出して，出現パターンを考察した。味覚形容詞ごとの別義の意味分類は，『大辞林』(1995)にしたがって行った。そして，味覚形容詞ごとの別義の重なり頻度と延べ頻度の違いを新聞と小説で比較した。その際，頻度が0またはそれに近い場合を除いて，両者の違いについてピアソンのカイ二乗検定を行った。以下では，味覚形容詞ごとの別義の出現頻度のパターンを考察する。

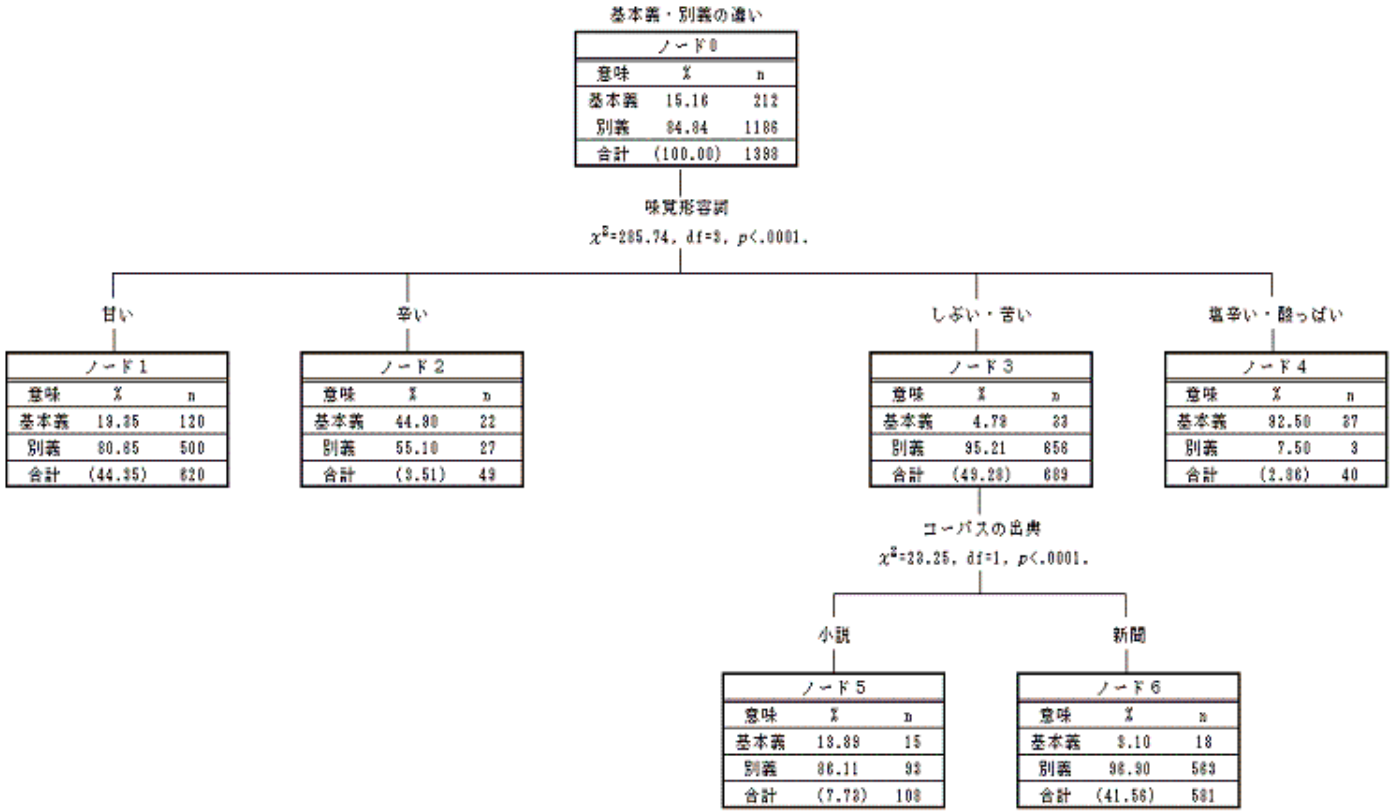

図１　新聞と小説における味覚形容詞の基本義・別義の出現頻度に関する決定木による分析

注1：n=1398．決定木は，χ2値の５パーセントの有意水準，親ノードの出現頻度は10以上，子ノードの出現頻度は５以上で樹木を成長させて分析した．

注2：網掛けの部分は，基本義と別義で頻度の多い方を示す．

3.2 味覚形容詞ごとの別義の出現頻度パターン

3.2.1「甘い」

「甘い」は〈砂糖や蜜のような味〉の基本義に対して，〈塩気が少ない〉〈香りや雰囲気などが蜜の味を思わせる。うっとりと快い〉〈人の心を引き付けて迷わせる〉〈物事に対する態度がなまぬるい。厳しさ・正確さに欠ける〉〈満足できる状態ではない。不十分だ〉〈程度が軽い〉などの６つの別義がある。これら６種類の別義の出現頻度を新聞と小説の別に，延べ頻度と重なり頻度を示したのが表２である。

表2　「甘い」の意味別重なり頻度と延べ頻度

意味		重なり頻度				χ^2検定	延べ頻度				χ^2検定
		小説		新聞			小説		新聞		
基本義	砂糖や蜂蜜のような味	8	—	43	—	—	29	—	92	—	—
別義	塩気が少ない	0	0.0%	0	0.0%	—	0	0.0%	0	0.0%	—
	うっとりと快い	35	59.3%	41	25.8%	$\chi^2(1)=21.312$, $p<.001$	53	60.9%	102	24.7%	$\chi^2(1)=44.080$, $p<.001$
	人の心を迷わせる	6	10.2%	10	6.3%	*n.s.*	12	13.8%	39	9.4%	*n.s.*
	厳しさ・正確さに欠ける	13	30.5%	84	52.8%	$\chi^2(1)=8.612$, $p<.01$	22	25.3%	197	47.7%	$\chi^2(1)=14.664$, $p<.001$
	不十分だ	0	0.0%	24	15.1%	—	0	0.0%	75	18.2%	—
	程度が軽い	0	0.0%	0	0.0%	—	0	0.0%	0	0.0%	—
合計		59	100.0%	159	100.0%		87	100.0%	413	100.0%	

注．*n.s.*は有意さがなかったことを示す．*p*は有意であったことを示し，その後にくってその有意水準を数値で表記した．

６種類の別義のなかで，出現頻度が最も多かったのは，小説では〈うっとりと快い〉，新聞では〈厳しさ・正確さに欠ける〉である。≪浜子と別れると，あまい気持ちがあとに残り，もっともっと意見してほしい気持だった。（小説）≫や≪抱きかかえた時の，あの鼻をくすぐる甘い香り。（小説）≫など，香りや雰囲気などが蜂蜜の味を思わせるような「うっとりと快い」という意味で使用されるのは，やはり新聞よりも人間ドラマを描いた小説に多くみられる（重なり頻度がχ^2=21.312,df=1,p<.01；延べ頻度がχ^2=44.080,df=1,p<.001）。一方，≪こうしたコーデックスの甘い基準が世界的なルールになれば，厳しい基準を採用している国が逆にガット違反として提訴されることになる。（新聞）≫≪金政権の外交安保チームは学者出身で固められており，かねて「甘い見通し」を懸念する声は強かった。（新聞）≫などの物事に対する態度が生ぬるい，〈厳しさ・正確さに欠ける〉という意味としては，政治や経済に関する批判に使われる傾向があり，新聞の方が小説よりも多く使用されている（重なり頻度がχ^2=8.612,df=1,p<.01；延べ頻度がχ^2=14.664,df=1,p<.001）。〈塩気が少ない〉および〈程度が軽い（例：よりの甘い糸）〉の意味では，新聞と小説ともに全く使われていなかった[4]．興味深いのは，〈不十分だ〉という別義は，新聞でのみかなり使用されていたことである（重なり頻度が15.1%，延べ頻度が18.2%）。とりわけ≪キューバは一回，リナレスが林の甘い直球を左中間席にライナーで打ち込む先制本塁打。（新聞）≫≪開幕投手は西村，岡林の２人に絞られているが，野村監督は「甘いストレートに気をつけるのは常識。（新聞）≫

などのスポーツに関連したものが多くみられたことである。これは，「甘い」が野球というジャンルで多様される傾向を示しているとも言えよう。

3.2.2「辛い」

「辛い」については，〈舌が刺激を受けるような味。舌がひりひりするような感じ〉の基本義の他，〈塩のきいた味〉〈（処置や評価が）情け容赦がない。苦痛を感じるほど厳しい〉〈心や体が痛むような状態。苦しい。堪えがたい。残酷だ〉〈差し迫った状態にある。危ない〉〈いやだ。気に染まない〉などの意味用法がある。「辛い」についての基本義と別義の延べ頻度と重なり頻度を新聞と小説別に示したのが表3である。

表3　「辛い」の意味別重なり頻度と延べ頻度

意味		重なり頻度				延べ頻度			
		小説		新聞		小説		新聞	
基本義	舌が刺激を受けるような味。舌がひりひりするような感じ	3	—	11	—	3	—	19	—
別義	塩のきいた味	1	33.3%	7	100.0%	1	33.3%	24	100.0%
	情け容赦がない	1	33.3%	0	0.0%	1	33.3%	0	0.0%
	苦しい	1	33.3%	0	0.0%	1	33.3%	0	0.0%
	危ない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	いやだ	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
合計		3	100.0%	7	100.0%	3	100.0%	24	100.0%

本調査で検出された用例のそれぞれの意味用法の使用頻度をみると，基本義と別義の使用頻度はほとんど同じであった。しかし，別義ごとの意味用法の使用頻度を比べてみると，別義の5種類に対し，本調査では≪ソ連解体直後は，旧ソ連の選手に対して東欧のジャッジの辛い採点が目立った。（新聞）≫≪点数はつけようがない（大内民社党委員長）と極めて辛い評価を下した。（新聞）≫などの処置や評価が〈情け容赦がない。苦痛を感じるほど厳しい〉意味で使用されるのが多く（とりわけ，新聞では重なり頻度で7回，延べ頻度で24回，いずれも別義で100%の使用），それ以外の意味での使用はほとんど見られなかった。とりわけ，〈差し迫った状態にある，危ない〉〈いやだ，気に染まない〉の意味用法の用例は全く見つからなかった。これについては，『大辞林』での用例[6]から察して，〈差し迫った状態にある，危ない〉〈いやだ，気に染まない〉の意味用法は，古い日本語でみることができるが，現代の日本語においては一般的に使用される意味用法ではないことがうかがえる。

3.2.3「しぶい」

「しぶい」については，〈柿のしぶのような味がする。舌がしびれるような感じだ〉の基本義に対して，〈華やかでなく落ち着いた趣がある。地味で深い味わいがある〉〈（しぶ柿でも食べたような）不

機嫌な顔つきだ。にがりきっている〉〈けちだ。金品を出し惜しむ〉などの別義がある。「しぶい」についての基本義と別義の延べ頻度と重なり頻度を新聞と小説別に示したのが表４である。

表4 「しぶい」の意味別重なり頻度と延べ頻度

意味		重なり頻度				χ^2検定	延べ頻度				χ^2検定
		小説		新聞			小説		新聞		
基本義	柿の渋のような味。舌が刺激する味	2	－	2	－	－	2	－	2	－	－
別義	地味で深い味わい	14	87.5%	30	81.1%	*n.s.*	18	54.5%	42	29.4%	$\chi^2(1)=7.563$, $p<.01$
	不機嫌な顔つき。にがりきっている	2	12.5%	4	10.8%	*n.s.*	15	45.5%	97	67.8%	$\chi^2(1)=5.802$, $p<.05$
	けちだ	0	0.0%	3	8.1%	－	0	0.0%	4	2.8%	－
合計		16	100.0%	37	100.0%		33	100.0%	143	100.0%	

基本義と別義の使用頻度をみると，「甘い」「辛い」と同じく，基本義よりも別義の出現頻度が高かった。別義ごとの使用頻度をみると，まず≪しぶい芸も派手な芸も，あの手もこの手も，一つとして役に立たない。(小説)≫≪「わしという万年白歯を餌にして，この百万の身代ができたのじゃぞえ」富本でこなれたしぶい声で御生前よくこう言い言いして居られましたから，いずれこれには面白い因縁でもあるのでございましょう。(小説)≫などの〈落ち着いた趣がある。地味で深い味わい〉の意味では，重なり頻度では小説と新聞での違いはないが延べ頻度では小説によくみられるようである(χ^2=7.563,df=1,p<.01)。やはりこういった心情的表現は，新聞（29.4%）よりも小説（54.5%）で好まれるのであろう。重なり頻度では違いがないが，延べ頻度では違いがみられたのは，「しぶい」が特定の名詞，とりわけ「哀感」，「声」，「のど」などと共起して出現することが小説に多いことに原因があろう。一方，〈不機嫌な顔つき。にがりきっている〉という意味では，重なり頻度に違いはないが，延べ頻度においては，新聞(67.8%)の方が小説(45.5%)よりもよく使われている(χ^2=5.802,df=1,p<.001)。これは，「顔」，「表情」のような特定の名詞と「しぶい」が共起して出現するのは新聞に多いことが原因であると考えられる。ちなみに，〈不機嫌な顔つき〉の意味用例の97回のなかで，「しぶい顔」は48回，「しぶい表情」は47回であった。「けちだ」については，≪助監督やスタッフに酒食をおごるでもなく，しぶい監督だったそうだ。(新聞)≫≪四十二人の社長が自分の会社では人が余っていると答え，賃上げにもしぶい姿勢を示している。(新聞)≫などの用例が新聞でのみわずかに使われていた。

3.2.4「苦い」

「苦い」については，〈舌にいやな味を感じる〉の基本義の他，〈不機嫌である。不愉快に感じる〉〈つらい。苦しい〉の意味用法がある。「苦い」についての基本義と別義の延べ頻度と重なり頻度を新聞と小説別に示すと表５のようになる。「苦い」についての別義の出現頻度の違いをみると，重なり頻度で

は小説と新聞で出現頻度に違いは認められなかった(x^2=75.063,df=1,p<.001)。しかし，延べ頻度では，新聞と小説に顕著な違いがあり，≪それをきいた鳥取藩の隊長は，苦い顔をした。(小説)≫≪またやり損なったという苦い感じが彼女の口の先まで湧いて出た。(小説)≫」などの〈不機嫌・不愉快〉という意味では，小説(66.7%)の方が新聞(8.1%)よりもよく使われていた。延べ頻度のみに使用頻度の有意差がみられたのは，「苦い顔（40回中38回）」の小説での出現頻度が特に高いことに起因している。一方，≪世界は四十六年前に終わった戦争や朝鮮戦争，ベトナム戦争と，苦い経験を重ねてきたのに，と思うと残念でならない。(新聞)≫≪五十年前の真珠湾での苦い思い出を持つ七十歳前後の元軍人と話すと，だれもが紳士的。(新聞)≫などの「つらい・苦しい」という意味用法では，逆に新聞(420回中386回，91.9%)で極めてよく使われ，小説(60回中20回，33.3%)ではそれほどではなかった(x^2=138.120,df=1,p<.001)。〈つらい，苦しい〉の意味用法について延べ頻度だけに違いが見られたのは，「苦い経験」の新聞での出現頻度（420回中220回）が特に新聞で高く，それが新聞での延べ頻度の高さに影響しているからであろう。

表5　「苦い」の意味別重なり頻度と延べ頻度

意味		重なり頻度				χ^2検定	延べ頻度				χ^2検定
		小説		新聞			小説		新聞		
基本義	舌に快くない味	10	—	11	—	—	13	—	16	—	—
別義	不機嫌。不愉快	3	23.1%	14	32.6%	n.s.	40	66.7%	34	8.1%	$\chi^2(1)$=75.063, p<.001
	つらい。苦しい	10	76.9%	28	67.4%	n.s.	20	33.3%	386	91.9%	$\chi^2(1)$=138.120, p<.001
合計		13	100.0%	42	100.0%		60	100.0%	420	100.0%	

注．n.sは有意さがなかったことを示す．pは有意であったことを示し，その後にくってその有意水準を数値で表記した．

3.2.5「塩辛い」

「塩辛い」については，『大辞林』では〈塩気が強い。しょっぱい〉の基本義のみ記述されており，表6からも分かるように本調査でも基本義での意味用法しか見られなかった。塩辛いの場合，「甘い」「しぶい」「苦い」「辛い」などに比べれば，味覚の意味から別のメタファー的な意味へは転用しにくいようである。

表6　「塩辛い」の意味別重なり頻度と延べ頻度

意味		重なり頻度		延べ頻度	
		小説	新聞	小説	新聞
基本義	塩かけが強い。しょっぱい	4	8	4	12

3.26「酸っぱい」

「酸っぱい」については，『大辞林』では〈酢のような味がある〉の味覚に関する基本義のみ明記されている。しかし，本調査では使用頻度は少ないものの，表7に示したように≪焼け鉄の酸っぱい匂いにも，機械油の腐りかかった悪臭にも，僕は甘美な興奮を嗅ぎられるのであった.(小説)≫≪バレンタインデーを前に，公社は「甘くて酸っぱい恋の味」.(新聞)≫などのような味覚に関する基本義からやや転用された意味用法を見つけることができた。また，前後の文脈が短くて，その意味用法についてははっきり説明できないが，≪それは，「最もすっぱいスポーツマンに与えられる賞」なのだという.(新聞)≫」のような用例も見つかった。

表7　「酸っぱい」の意味別重なり頻度と延べ頻度

意味		重なり頻度				延べ頻度			
		小説		新聞		小説		新聞	
基本義	酢のような味	3	—	13	—	4	—	17	—
その他の用例	—におい	1	100.0%	0	0.0%	1	100.0%	0	0.0%
	—恋	0	0.0%	1	50.0%	0	0.0%	1	50.0%
	—スポーツマン	0	0.0%	1	50.0%	0	0.0%	1	50.0%
合計		1	100.0%	2	100.0%	1	100.0%	2	100.0%

4. おわりに

本研究では，6種類の味覚形容詞に関する味覚の基本義とその転用である別義の出現頻度のパターンを考察した。その結果，決定木による分析と別義ごとの詳細な検討から，味覚形容詞の種類によって，基本義と別義の使用パターンが大きく異なっていることが分かった。決定木による分析では，「塩辛い（別義0回）」「酸っぱい（重なり頻度・延べ頻度ともに，小説が1回，新聞が2回）」は90％以上が基本義で使用されており，別義での使用は極めて少ないという傾向がはっきりしていた。しかし，これらの2つの味覚形容詞を除けば，基本義よりも別義で使用されることが多いことが分かった。とりわけ，「しぶい」と「苦い」は，全体の出現頻度がある程度高く，特に別義での使用が95％以上と圧倒的に多いことが明らかになった。また，「甘い」も80％以上が別義での使用で基本義の使用より多く，「辛い」も別義での使用が55％と半数を上回った。一方，「しぶい」と「苦い」については，他の味覚形容詞と異なり，小説と新聞で使用パターンに違いがみられ，小説での別義の使用頻度（86.11％）も高いが，それ以上に新聞での別義の使用頻度（96.90％）が極端に高いことが分かった。さらに，別義には味覚形容詞ごとに多様な種類があることから，それらの重なり頻度と延べ頻度の違いを新聞と小説で比較した結果，新聞と小説でその使用頻度に違いがある意味用法が明らかになった。例えば，〈うっとりと快い〉の「甘い」，〈不機嫌な〉意味の「苦い」は小説で，〈不十分な〉の意味の「甘い」，〈つらい･苦しい〉の意味の「苦い」は新聞でよく使用されている。また，〈不機嫌な顔つき〉の意味の「し

ぶい」などのように，重なり頻度では違いがないが延べ頻度では違いがみられる場合もあった。これは，〈しぶい顔〉や〈しぶい表情〉のような表現が新聞で繰り返し使用されていることに原因があった。このように新聞では味覚形容詞が特定の名詞と共起して別義として頻繁に使用される傾向があることが分かった。

【注】

1）共感覚的比喩というのは、ある感覚分野のことを表現するのに別の感覚分野に属する語を比喩的に用いることをいう（国広、1989）。例えば、「しぶい声（味→聴）」、「すっぱいにおい（味→臭）」、「暖かい色合い（触→視）」といったものである。

2）深田淳のコロケーション情報抽出システムでは、検索語の共起範囲、共起語の品詞の指定、共起語のソート方法などを選択することができる。

3）本研究ではデータ解析に決定木（Answer Tree）による分析方法を用いているが、それは決定木による分析の場合、変数の数に関係なく、基本義と別義を区別する変数は何かという予測分析ができる画期的な手法であると考えたからである。一方、カイ二乗検定による分析の場合、2（基本義・別義）×2（新聞・小説）×6（味覚形容詞）となる。はじめの2変数の2×2を味覚形容詞ごとに繰り返すこともできるが、全体を概観できないという弱さがある。また、2次元のデータには強いとされるコレスポンデンス分析の場合、2（基本義・別義）×6（味覚形容詞）という組み合わせで、新聞と小説とを別々に分析するか、新聞・小説を味覚形容詞に埋め込む（新聞の「甘い」頻度のように）方法を使うことができる。しかし、新聞・小説を一つの独立した変数とは分析することはできない、そのため、3次元の分析には向かないといえる。

4）ただ、〈塩気が少ない〉の意味用法については、田中(1982)によると、山口県方言では塩気が足りないことを「甘い」というとし、十分に辛くなければ、砂糖の味は全くなくても「辛い」の反対語「甘い」を用いるとしている。そのため、山口県の方言が多く収録されているコーパスを用いて検索した場合、本研究の結果とは異る結果が見られる可能性は排除できない。

5）〈差し迫った状態にある。危ない。〉については、《一・き命いきて北陸道にさまよひ（平家11）》、〈いやだ。気に染まない。〉については、《一・しや。眉はしも、かは虫だちためり（堤中納言（虫めづる））》の用例がみられる。

【参考文献】

影山太郎(1999)『形態論と意味』くろしお出版

楠見孝(2003)「味覚メタファー表現への認知的アプローチ」日本言語学会第127回大会予稿集, 9-14

国広哲弥(1982)『意味論の方法』大修館書店

国広哲弥(1989)「五感をあらわす語彙-共感覚比喩的体系」『言語』11, pp.28-31

国広哲弥(1994)「認知的多義 - 現象素の提唱 -」『言語研究』106, pp.22-44

国立国語研究所(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版

杉本孝司(1998)『意味論2 - 認知意味論 -』 くろしお出版

武藤彩加(2001)「味覚形容詞「甘い」と「辛い」の多義構造」『日本語教育』110, pp.42-51

武藤彩加(2002)「「おいしい」の新しい意味と用例」『日本語教育』112, pp.25-34

辻幸夫(2002)「メタファーの基本用語」『月刊言語』31(8), pp.24-25

西尾寅弥(1983)「食の感覚を表す形容詞」柴田武・石尾道道(編)『食の文化フォーラム、食のことば』ドメス出版、pp.99-111

松村明編(1995)『大辞林』第2版　三省堂

森田良行(1994)『基礎日本語辞典』角川書店

飛田良文他編(1991)『現代形容詞用法辞典』東京堂出版

日本語學硏究　第12輯(2005. 3. 20. pp.143～156)

＜要 旨＞

味覚形容詞「甘い」「辛い」「しぶい」「苦い」「塩辛い」「酸っぱい」の基本義と別義に関する新聞および小説のコーパス出現頻度の解析

本稿では，小説と新聞のコーパスに現れる現代日本語の味覚形容詞「甘い」「辛い」「しぶい」「苦い」「塩辛い」「酸っぱい」に関する味覚の基本義とその転用である別義の出現頻度パターンを取り上げ，計量的な側面から現在日本語の味覚形容詞の多義構造の一面を明らかにした。基本義と別義の出現頻度を全体的に把握するため，決定木による分析を行った。その結果，「塩辛い」と「酸っぱい」は基本義での使用が圧倒的であり，別義での使用は極めて少ないという傾向が見られた。しかし，「しぶい」「苦い」「甘い」「辛い」は基本義よりも別義での使用が多かった。また，「しぶい」と「苦い」の場合，小説と新聞で使用パターンに違いがみられ，小説での別義の使用頻度（86.11%）も高いが，それ以上に新聞での別義の使用頻度（96.90%）が極端に高いことが分かった。さらに，別義ごとの意味用法の重なり頻度と延べ頻度の違いを新聞と小説で比較した結果，新聞と小説で違いがある意味用法を明らかにすることができた。例えば，〈うっとりと快い〉という意味の「甘い」，〈不機嫌な〉意味の「苦い」は小説で，〈不十分な〉の意味の「甘い」，〈つらい・苦しい〉の意味の「苦い」は新聞でよく使用されている。また，〈不機嫌な顔つき〉の意味の「しぶい」などのように，重なり頻度では違いがないが延べ頻度では違いがみられる場合もあった。これは，〈しぶい顔〉や〈しぶい表情〉のような表現が新聞で繰り返し使用されていることに起因していると考えられる。このように，新聞では味覚形容詞が特定の名詞と共起して別義として頻繁に使用される傾向があることが分かった。

▣ 임현정(林炫情)

広島大学外国人客員研究員

735-0012　広島県安芸郡府中町八幡3丁目11-1-904

082-284-6571, (090-9069-0655

lim@hiroshima-u.ac.jp

▣ 다마오카 가쓰오(玉岡賀津雄)

広島大学教授

739-8524　広島県東広島市鏡山1-1-1　広島大学留学生センター

0824-24-6288, (090-7774-3124

ktamaoka@hiroshima-u.ac.jp

▣ 미야오카 야요이(宮岡弥生)

広島経済大学常勤講師

731-0192　広島県広島市安佐南区祇園5-37-1　広島経済大学

082-871-1068, (090-9734-6061

y-miya8411@hue.ac.jp

■ 투 고 일 : 2004년 11월 30일

■ 심사개시 : 2004년 12월 22일

■ 심사완료 : 2005년 1월 17일